

『デイリーニュースの時間となりました。本日はタチバナでお送りいたします。

……政府がついに、一部の県へ避難勧告を発令しました。今朝十時ごろ、〇〇首相が記者会見を開き、天候悪化の影響から警告を強める意向を示し、地域の人へ早急に避難するようと呼びかけました。これは異例の事態です。

政府は「昨今の工業化の発達により、連続的な雨天が続くようになってしまった。その影響は計り知れず、今もなお猛威を振るい続けているため、早急に対処をしていきたい」。そしてこれからの対処については、「環境省や自衛隊と話し合って、円滑かつ適切な対応をしていきたい。皆が安心して暮らしていける日を目指す」と発表。事態が深刻であることを訴えています。

なお避難勧告が出されているのは工場から排出される煙や世界の偏西風の変化の影響から、近年雨天続きとなっていた、計百二十カ所。中でも長期的に雨天続きとなっている〇〇県には特別避難勧告が出されています。今もなお、避難は済んでいない状況です。それでは今回の出来事についてもう一度経緯をお伝えしていこうと思います———』



*Signs of rain*

彼は地平線まで広がる雨雲を睨んでいた。

ドームのように光を遮り、朝や昼の概念を覆い隠すそれは、途切れない暗たんとした街と変化させる。昔は機械音が鳴り響くウォール街と称される街並みであったはずなのに、今では静寂のラム街と言われても仕方ない惨状であった。

今日だって光差するような景色が生まれることはない。天井の雨雲を支えるかのように真っ直ぐ伸びたビルや煙突。昼夜を問わず点いている街灯に、『Close』とぶっきらぼうに掲げられた店舗。造り上げたものの全てが雨によって錆びとなり、錆びは流れる涙のように塗装をしていた。すべてが雨の原因であり、すべては人の責任。

人の罪と罰をこの街と空は映し出してしまう。そして、これらを直す人はもういなくなってしまう。まさに閑散とした街であり、ここに立つものは人類最期の一人だと錯覚してしまうことだろう。

そんな雨音しか無かった場所に、一つの足音が混じる。

それが彼であった。上空を睨み、藻が蔓延るタイルに気を付けながらも、慣れた様子で雨の中を突っ切る一人の少年が音を出していたのだった。

『本日は雨模様。外を出るには絶好の曇り空でしょう』

今日の朝に確認した天気予報を鵜呑みにして、それを後悔したのはこれで何度目だろうか。彼は走りながらも、そんな後悔に苛まれていた。もちろん日頃から携帯しているカップはあるが、叩き付けるような雨が隙間を狙って服は濡れている。

既に水溜りによってしっかりと吸い込んだブーツは軽い重石となっていた。踏み込むたびに水が搾り取れる音は、ざんざん降りの騒音の中でも聞こえ、気持ち悪さを感触と共に助長させた。いつもの靴を投げ捨てようかと思わせてくる。

「ああもう……何で晴れないかなあ……!」

零れるように言葉が出てしまい、不安から靴を見つめる。大切な物を守るように抱えていたその中身にはデジタル一眼レフカメラが入っていた。壊すわけにはいかない大切なカメラ。

彼はそれを見て皺を寄せてしまう。でもそれは壊れたという不安からではなく、カメラの中にあ

るものに憤りを感じているからであつた。今日も、彼女に見せるべき写真を撮ることが出来なかつた。空を見続ける彼女に、新しい姿を見せることが出来なかつた、と。

そして雑念のためか、彼は注意不足から水たまりに突つ込んでしまふ。彼は一瞬だけ苦い顔になるが、すぐに頭を振って、前へ向く。

早く彼女に青空を見せないといけないう。そう思つて、彼は口を堅く結ぶのであつた。

彼が空を撮影しよう思つたのは、彼女……ソラとの関わりがあつたからだ。

……だが彼とソラが知り合つたのは、何も幼馴染であつたからとか、クラスで一緒だつたからではない。病室で知り合つた、本当にただそれだけ。入院したことのない彼にとって、彼女と出会えたのはある意味奇跡に近いものであつた。

きっかけは彼がソラを見つけたことから始まる。

始めに、彼はあの時苦しんでいた。原因は親との関わりで、具体的に言えば父親と母親が離婚をしてしまったこと。そのために母親が家事と仕事の両立をしなければなくなり、いつしか家内での会話も、会つた時の口数も減つてしまつたことがあつた。

口数が減つた。それが彼にとつて、孤独と考えるようになり、辛いものだと感じてしまふ。自分の時間が増えると考えることが出来たかもしれないが、その時の彼はまだ自由よりも愛情を求める歳であつた。どうして自分に何もしてくれないのか、どうしていつもいなくなるのか、もしかしたら嫌われているのではないか。

彼は不安のことを誰にも相談できずに悩み続け、苦しんでいたのだつた。

もしかしたら病院の前まで立ち寄つたのも、同じ悩みを持つ者と会えるかもしれないという、無意識な願望から来ていたのかもしれない。変わるかもしれないという淡い期待が、あの時の彼に行動をさせていたのかもしれない。

そんな時に、彼はソラと出会つたのだ。

彼女は窓の滴を見つめ、なぞる様にしてそれに触れようと指を動かしていた。窓に垂れた滴の軌跡をなぞり、終わってはまたもう一度なぞることを繰り返す。何度も、何度も、何度も。同じことを繰り返し、それだけで彼女の世界は完結し、ループし続けていた。

そんな景色に彼は目を奪われていた。今でもソラの姿は鮮明に思い出せるぐらいに。外から見えた彼女の表情はとても穏やかで、落ち着きすぎていて。地震が起きても、天変地異が起こつてもまるで自分とは関係ないと言わんばかりの表情と行動だった。

彼女は彼の視線に気付いて目線だけを合わせる。取り繕うように微笑み、軽く会釈をしていた。簡単な挨拶だが、彼女の瞳から読み取れる、憧れを彼は強く感じてしまう。

だからこそ、彼は急いで病室へ向かった。階段を上り、先ほどまで見ていた場所を推察して、彼女の部屋まで走り続ける。扉を開け放った先に見えた景色。それは彼にとって、嫌なことを一瞬忘れさせるほどの美しさだった。

彼が何も言えないでいると、彼女はこちらを振り返り、もう一度会釈をしてきた。

「……こんにちは。今日は良い天気なのですか？」

それが交わした、最初の挨拶。そして繋がりを持つきっかけであった。こちらを見ず、誰かを理解しているうえでの言葉掛け。

彼はそこで彼女の瞳の意味を知った。どうして彼女の世界が終わっていたのか、どうして穏やかだったのか、どうして憧れを感じていたのか。そして挨拶に隠された、彼女の想いも。彼女の全てを彼は理解することが出来た。自分と同じ、いやもっと辛い気持ちなのだと察した。

だからこそ、彼女に言いたい言葉があった。

「……今日から、良くなると思う」

それは叶えたい想いとなり、口にした言葉が約束となつて。

やがて彼はカメラを手にし、約束のために空を見続けているようになっていた。

続きは QR コードからダウンロードしてお楽しみください！